

研究課題	道徳性の再定義に向けた心理学領域における道徳性概念のレビュー		
氏名	浅部 航太	所属	教育実践創成講座
		職名	准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ ←受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】 （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） 1. 研究の目的・方法 道徳性の諸様相の説明は昭和30年代から大きく変わっておらず、より分かりやすく適切な示し方が期待されている（中央教育審議会、2016）。荒木は、道徳科において育む道徳性を、「道徳的知識」「道徳的スキル」「道徳的实践意欲と態度」と再定義している（荒木、2022）。今後はこの枠組みが適切であるか、教育内容として具体的に何を扱うかについて検討する必要がある。近年は心理学領域における道徳性の研究がめざましく、その知見は道徳性の枠組みや教育内容を検討する一助となる可能性がある。そこで本研究では、心理学領域における道徳性の概念についての文献調査を通して、道徳性の枠組みおよび教育内容について検討するための道徳性概念の整理を行った。 2. 研究の結果 ピアジェは、道徳性を個人が規則に対する尊敬の中にある判断を含む問題と捉えた（Piaget, 1932）。ピアジェの論を発展させたコールバーグは、道徳性を「正義に関する判断」と捉え、6段階の道徳性発達段階を示した（Kohlberg, 1981）。コールバーグが想定した道徳性は、公平さといった義務論的な正義に関する判断に限定して取り上げられていた。 一方ギリガンは、コールバーグ理論を批判し、正義に関する判断だけではなく思いやりや配慮といったケアの存在を提起した（Gilligan, 1982）。トマセロは、道徳性には「同情の道徳性」と「公正の道徳性」があり、個体から二個体、二個体から集団へという二段階で進化したと仮説を立てた。加えて、同情は二個体間では配慮、集団では忠誠が含まれ、公正な判断には罪悪感、責任感や義務感などを伴うと主張した（Tomasello, 2016）。このように、道徳性には義務論的な正義だけではなく、ケアに関わる内容が存在するとともに、道徳的判断には罪悪感といった道徳的感情が関わっていることが明らかとなった。 判断と感情の関係については、ハイトの社会的直観モデルなどの多様な論が散見された（Haidt, 2012）。その中で、グリーンは集団内での対立にはオートモード（情動的で直感的な反応）、集団間の対立にはマニュアルモード（より分析的で理論的な反応）を使い分けることを提案した（Greene, 2013）。荒木は、道徳的スキルには、認知的スキル（道徳的判断力）と社会情動的スキル（道徳的感情；直観的な道徳判断）が含まれると述べるが、「判断と感情には使い分けが必要」というグリーンの論に依拠した場合、判断と感情を相補的に捉える荒木の示し方は一定の妥当性があると言える。 チュリエルは、社会的領域理論を提唱し、社会的判断には3つの異なる領域から構成される知識（道徳領域、慣習領域、個人領域）が調整された結果であることを示した（Turiel, 1983）。ハイトは、道徳性基盤理論を提唱し、人類史の適応的課題に応じて進化的に獲得されてきた六つの道徳基盤（ケア／危害、公正／欺瞞、忠誠／背信、権威／転覆、神聖／墮落、自由／抑圧）があると主張した（Haidt, 2012）。さらに、デイモン＆コルビーは、道徳性を個人の内面から湧き出る理想と価値観に基づいた行動の結果として描き、特に「誠実」「謙虚さ」「信じる心」の三つの美德を強調した（Damon & Colby, 2015）。 以上のように、道徳性の構成概念は拡大傾向にあることが明らかとなった。上地は道徳の複数性（リベラリズム道徳・共同体道徳・ケア倫理・価値相対主義）に着目し、道徳授業における適用の問題を挙げる（上地、2023）。道徳性の概念においても、例えば、リベラリズム道徳は正義、共同体道徳は謙虚さなど、道徳体系に対応した道徳性があると推察される。今後は、レビューの対象を広げるとともに、道徳体系を意識した道徳性の枠組みを検討する必要がある。			
【研究成果発表方法】 「道徳性の再定義に向けた心理学領域における道徳性概念のレビュー」、浅部航太、日本道徳性発達実践学会『道徳性発達研究』（執筆中）			

発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。